

現地校との交流が育むコミュニケーション能力の向上

前ベルリン日本人国際学校 教諭

北海道稚内市立稚内南中学校 教諭 西林 慶 武

キーワード：在外教育施設、ベルリン、英語教育、国際交流、現地校

1. はじめに

海外で生活する児童生徒や保護者の願いの1つに、現地の児童生徒と交流をする機会を持つということがあげられる。私自身も英語教育に携わってきたなかで、英語をコミュニケーションツールとしていわゆる「活用できる英語」を児童生徒達に伝え、国際交流に活かしたいという想いがあった。私が派遣されたベルリン日本人国際学校は、自前の校舎を保持しているのではなく、現地にある既存の建物を借用している。現在使用している校舎は、現地校に併設された建物を活用していることもあり、中庭や講堂、さらには体育館を使用する際には、現地校にそれらの施設を貸してもらって授業や行事を行っている実態がある。当然、不便なことも多いが、現地校と隣接しているという状況は、そこに通う子ども達と毎日交流する機会をもてるという利点もある。

ドイツ語は英語の兄弟言語と呼ばれるように、類似点も多いことから、ベルリンでも若い世代を中心に英語を用いた意思疎通が可能なことが多い。このような状況であれば、日本人学校の生徒たちが、現地校の児童生徒とコミュニケーションをとる際に、英語を活用することができると考えた。英語を外国語として話す地域で国際交流の機会を作り、児童生徒達と共に活動できたことは、生徒たちにとってはもちろん、私自身にとっても意味ある経験になった。以下、その概略を紹介したい。

2. 生徒の英語力・ドイツ語力の実態を鑑みた、国際交流活動の推進

(1) 外国語を活用する機会を用いることにより英語学習への意欲を高める

日本人の児童生徒達が、現地校に通う児童生徒たちと交流をしたいと思っても、言葉の壁に阻まれ上手く意思疎通がはかれないことも少なくない。ベルリン日本人国際学校では、隣接するコンラート小学校（現地名Conrad Grundschule）と、姉妹校であるドライリンデン小学校（現地名Dreilinden Grundschule）と交流する機会を設けているが、多くの場合、思うようにコミュニケーションがとれないことが多い。ベルリン日本人国際学校では、小学校1年生から中学校3年生までの全校生徒を、レベル別に3つのクラスに分け、ネイティブスピーカーによるドイツ語の授業を週2回実施しているが、習得には時間がかかり、両親のいずれかがドイツ語話者である場合や、言語取得能力が非常に高い児童生徒を除き、なかなかドイツ語を自由に使うことは難しい。

近年、ドイツでは英語教育への関心が高まっており、学校によっては小学校1年生から英語学習が始まっている。隣接するコンラート小学校との交流授業と、日本人学校の近くにあるドライリンデンギムナジウム（現地名Dreilinden Gymnasium）と交流する機会を活用し、英語を用いてコミュニケーションをとることで、児童生徒達のもつ「海外の友だちを作りたい」とか、「外国語（英語）をもちいて意思疎通を図りたい」という願いを叶えることをめざした。この取り組みは同時に、生徒たちが英語の有用性を改めて発見し、自らの英語への学習意欲の喚起に繋がると考えた。

(2) 児童生徒の英語力とコミュニケーション能力

在外教育施設における、現地言語の学習への意義は充分にあると考えているが、保護者及び児童生徒達の英語への意欲関心は非常に高いというのが実際である。ベルリン日本人国際学校では、小学校3、4年生は週1回、小学校5年生以上は、週2回の英会話の授業も行っている。しかしながら、小学生ながら英語検定の準2級や2級を取得しているから、英語でスムーズな意思疎通ができるかということ、必ずしもそうではない。実際に英語を

用いて会話する十分な経験が無いまま、現地校やインターナショナルスクールへ入学しても、上手に意思疎通を図ることができない児童生徒もいる。その様な例をみるにつけ、英語でスムーズに意思疎通を図るためには、ある程度の英語力に加え、コミュニケーション能力を向上させることが重要であることに気づかされた。以上のような状況において、中学生の英語の授業は日本の検定教科書を用いながらも、生徒が英語を話す時間をできるだけ多く確保し、児童生徒が英語を用いてコミュニケーションをとったり、活動をしたりする中で、文法や語法を理解するという授業を行ってきた。しかし、せっかく学習した英語で同年代のドイツ人とコミュニケーションをとる機会は、なかなか得ることができず、是非とも実際の場面で英語を用いてコミュニケーション能力を高める機会を作りたいと考えていた。

3. 現地小学校との英語の交流授業

(1) 交流授業の背景

隣接するコンラート小学校との授業交流の一環として、コンラート校の授業に日本人学校の児童が参加したり、コンラート校の児童を日本人学校の授業に招待したりする交流が行われている。この交流で英語の授業を行い、日本人学校の生徒と一緒に現地校へ通う児童生徒が授業をうけることで、英語によるコミュニケーションをとる機会を作ることができた。

(2) 交流授業のねらいと内容

①交流授業のねらい

コンラート校との交流授業は、年1回、およそ1時間程度の限られた時間ではあるが、せっかくの機会であるので、できるだけ児童生徒同士が英語を用いてコミュニケーションをとる時間にしたいと考えた。しかしながら、中学生にただ英語で話さないと言っても、なかなか会話が盛り上がらないのは明らかである。

そこで、大きく2つのねらいを持ち授業を組み立てた。1つめは、ドイツと日本の文化や習慣の共通点や相違点を交流できるようなねらいを設定するという。互いの文化を知ることは、国際理解への第一歩だと考え、それらを交流し理解することで、双方の文化を尊重できるようになると考えた。

2つめは、ただ英語を話すだけではなく、実際に何かを作ったり、活動したりすることで、英語を用いる機会が確保できることをめざした。活動を説明するためには、英語を用いる必要が出てくるし、必要に迫られることが生徒同士のコミュニケーションを活性化する上で効果があると考えた。

②授業と交流の内容

2012年12月に行われた1回目の授業では、コンラート校児童約15名を2グループに分け、各グループに日本人学校の生徒を1名ずつ配置した。日本の生徒とドイツの生徒で、英語でコミュニケーションを取りながらクリスマスカードをつくるという活動を中心に据え、日本人中学生2名には、具体的な活動内容と、クリスマスカードの作り方について理解させ、英語での説明の仕方を練習させておいた。

作業に集中するあまり、残念ながらあまり会話が進まなかったが、コンラート校の児童たちが、次は何をすべきか？‘What should I do?’と英語でたずねたのに対し、日本人学校の中学生達が、懸命に英語で説明する場面があった。授業の最後には、‘Thank you for your interesting class.’や‘I enjoyed this class.’など英語で感想を述べるなど、コンラート校の児童たちは、小学校5年生程度でも英語を用いて積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が身についていることが伺えた。

2013年に行われた2回目の授業交流では、日本人学校が中学1年生2名のみクラスであったということもあり、前回より活動のレベルを下げ、日本人学校の生徒に事前に活動の指示はせず、中学生とドイツ人児童に英語で指示をしながら活動を行った。前回の反省を活かし、お互いの交流が進むように、「自己紹介ゲーム」を行い、自己紹介をしながらゲームをする時間を設定した。ちなみにゲームの説明も全て英語で行ったが、混乱なく活動

に取り組んでいた。前年度実施した際に、コンラート校児童の英語力が非常に高いことを確認していたので、今回はドイツと日本の文化の違いについて会話する機会を、教師のコーディネートで設けた。クリスマスツリーと鏡餅、教会でのミサと初詣、クリスマスプレゼントとお年玉、クリスマスカードと年賀状などを比較し、それぞれの文化の行事について英語で紹介したり交流したりすることができた。この時間を通して、日独の文化の違いに気づくと共に、お互いの文化を説明、交流する機会を設けた。

2014年に行われた3回目の授業では、コンラート校の児童の英語力が、前年度までの状況と少々異なり、英語での意思疎通になれていないところもあったが、日本人学校の生徒達のコミュニケーション能力が高まってきていることもあり、日本人学校の生徒が積極的にコミュニケーションをはかろうとする場面が多く見られた。2回目同様、自己紹介とグループ作りをゲーム形式で行い、4つのグループで活動を行った。内容としては、ベルリンにある水族館に掲げられている鯉のぼりを切り口に、こどもの日について説明した後、新聞紙で紙の兜を作り、日独両国の「こどもの日」について共通点や相違点を交流しあった。授業の後半には、グループ毎にドイツの年中行事についてクイズを作り、ベルリン日本人国際学校とコンラート校という隣接する2つの学校がそれぞれ異なる文化を持っていることと、異なる文化を持っているからこそ、交流を通してお互いの理解が進むことを伝えて授業を締めくくった。



4. 現地中学・高等学校との交流授業

(1) ギムナジウム校との交流授業へのねらいと背景

①交流授業のねらい

前述したコンラート校は、日本の小学校にあたる学校であったので、中学生と同年代の学校との交流の可能性を探り、日本人学校の近くにあるドライリンデンギムナジウムとの交流授業を実施した。この取り組みは、学校規模で行っている交流活動ではなく、英語科教員の想いで実現することが多かったこともあり、毎年行うことは難しかったが、3年間で2回の交流を行うことができたので、今後も継続して行える事業に発展させることができると感じた。

②授業と交流の内容

2012年度に行った交流では、ベルリン日本人国際学校の中学生2名とともに、ドライリンデン校で2時間の活動を行った。1時間目の英語の授業は、交流とはいいながら参観しただけであったが、日本人生徒が、授業の合間にドイツ人の生徒からドイツ語で話しかけられたものの意思疎通が図れず、英語でコミュニケーションをとる様子がみられた。

続く体育の授業では、変則的なドッチボールを一緒に行うなかで、生徒たちは英語を用いてコミュニケーションをとることができていた。日本人学校の生徒の一人は、交流したクラスのなかに、通学時に同じバスにのっているドイツ人生徒がいることに気づき、「今度はバスで声をかけてみようかな」と話していた。

残念ながら、交流授業を担当してくださったギムナジウム校の英語科教諭が、体調を崩されていたこともあり、翌年には交流を行うことができなかったが、2014年度には、1年目より両校の交流が深まる形で実施できた。1時間目の英語の授業では、前半は日本人学校の生活について、ドライリンデン校の生徒が事前に考えた英語の質問を行い、それらを通してお互いの学校の様子を交流する時間になった。後半は、If節をもちいた仮定法の授業を日独両校の生徒が一緒に参加した。授業自体が英語によるオーラルイントロダクションであったこともあり、

文法内容としては日本の高等学校程度の難しい内容であったが、日本人学校の生徒達も積極的に参加し、自ら挙手をして授業に参加する姿勢には、正直嬉しい驚きを感じた。

休み時間には、グループ毎に校内を案内してくれたり、一緒にバスケットボールをしたりして楽しんでいたのである。ドライリンデン校の生徒達が積極的に話しかけてくれる姿勢に助けられた部分も少なからずあったが、教室を離れて、英語をもちいてコミュニケーションをと



るという経験は、日本人学校の生徒達はもちろん、ドライリンデン校の生徒達にとっても楽しい経験となったように感じる。帰り際には、ドライリンデン校の生徒達と名残惜しそうに別れる日本人学校の生徒達の姿は、この交流が非常に意味のあるものになったことを実感させてくれた。交流自体も、1年目の頃に比べてかなり充実した内容に発展したが、個人差はあるものの日本人学校の生徒のコミュニケーション能力の高まりを感じられたことが成果として大きい。

5. まとめとして

交流活動を通して、生徒の英語学習への具体的な必要感を高めることで、日常の英語学習への意欲がより具体的なものになり、その成果として高い英語力を身につけることに繋がった。この成果は、英語を学習することによって、英語を話す世界中の人達と意思疎通を図れるということに気づかせられたのはもちろん、自分たちが学んでいる英語が、コミュニケーションへ直結しているという自信にも似た実感を生徒にあたえていると感じた。もちろん、生徒が身につけた表現やコミュニケーションへの姿勢は、生徒達の英語力の向上に非常に役に立っており、結果として英語検定などの資格試験でも成果が表れていた。

また、交流授業を通して、教師自身が学んだ「日常生活や授業で積極的にコミュニケーションをとる姿勢を身につけることの大切さ」は、英語の授業で生徒のコミュニケーション能力を高める活動を多く取り入れることに繋がった。その結果、それらの授業を通して、生徒達は英語を用いて意思疎通を図ることへ躊躇しなくなるばかりか、自分の言いたいことを伝えるために「言いかえ」や例示を用いて説明するというコミュニケーションに直結する力を身につける生徒が増えていった。

実践的なコミュニケーション能力の向上という観点で言えば、現地校との交流授業はまさにうってつけの取り組みであるし、授業のねらいを明確にすることで、人と人とが実際のコミュニケーションを通して、コミュニケーションへの姿勢を学び合うという、非常に素晴らしい効果が生み出されたと感じている。交流を通して、日本人学校と現地校の生徒たちから学んだことへの感謝を持ちつつ、今後の教育実践に活かして行きたい。